

3 保隙装置装着後、来院を中断した患者の追跡調査

○矢野里香、宮崎映子、広田和子、中田 稔

九大・歯・小児歯

小児の歯科診療においては、小児の口腔領域の健康管理と健全な発育の育成のために、定期診査は欠くことのできないものである。特に、齲蝕や外傷にて乳歯を早期に喪失し、保隙装置を装着するに至った症例は、乳歯喪失後の空隙を保持し、後継永久歯が萌出するまで長期にわたって経過を観察する必要がある。

そこで、九州大学小児歯科が診療を開始した1979年 4月から1989年 3月までの10年間に、当科外来を受診した5000人の小児について、処置記録を中心に保隙装置の装着状況とその経過を調査した。その結果、871人（約17%）が保隙装置を装着し、そのうち368人（保隙装置装着数の約42%）が保隙装置を装着したまま来院を中断していたことが判った。

今回、中断となった368人中、住所が確認された287人に対し、中断理由とその後の経過を明らかにし、術者側と患者側の問題点を把握するとともに、今後來院を中断せざるをえない患児に対してどのように対処すべきかという事を検討するために、アンケートを郵送し追跡調査を行なった。

アンケートでは、来院を中断した理由、その後の歯科への受診状況、装着していた保隙装置の処置経過、中断後の咬合に関する問題点の有無について調査した。アンケートを回収できたのは167人（回収率約58%）で、その結果について報告する。